露川責

完

イ 曽 4
600
171

特
門 イ 曾
號 600
巻 171

このおもて山本宗洪翁（俳名兜岡）啓春院の父 壮年のころ騰写せられ
とり餅の十五六歳のころ土かへにかゝりて待りし日光のうへ
まとまる賜りしなりその方かの跋文居士にまかりせまし
かあらなりかりのひかりて復このかなにおさめおくれ
なりき

口状

此度口状を認るハ先ヶ屋と白老とハ凡十年の旧交ありて
而後ニ一度書通ニ二度俳諧の是非申ハべりても翁点須
要て辨ぜぬハ先ヶ屋ハ蕉門を学ぶ合点ありや又自己の一流
を立し蕉門をはなれし合点ありや好んにて承りハ
へハ芭蕉の先人ニ重ねたりの変事ありし又ハ十段なり
傳法なる十国ニ追ふれ中ハ白老も何先人の返事に
あらりけれハ此度ニ越れ先人にて折角の名月傳
とて故翁の俳諧を従白ニ至るまて二世謝しにく

龍澤文庫

凡十は処中ノ切挨拶ノ切〻の外ハ一句も蕉門は用ひ
ずして新る俳諧の害なるべし此通一編書いたしは
此趣意ハ識者の目にては

一 当時の俳諧は凡ハ天下〻幾万人か有之候も此方より
論義ニハおよばず当場より自己の作の事にて芭蕉を
売わたく人なれバ初心の者ハ蕉門の事なりと誓紙に
血判の信心を起させ其を蕉門の終なる者なりし
何方の流派にも俳諧ハ下手なれバ律義成る故
あるゝ也通なりとわかりぬといへるハ此世の人は似せ
ものに多く候さ是俳諧の目利はなきものなれバあたかし
例の蕉翁の遺訓なりとて小松連中の伝授の書く
誠に当時に属せる当流と誓紙血判の伝授なき輪の
地は雑と云三越にて当房を築ハ然人ハ二郎に二人も
ある座しそれハあまたの是中とあり合の事なれ
当場を込る事ハなきぬ其尾にて芭蕉とハやあり其
向の付屋にて俳諧の出合ハなし右外三越の屋に
当房を学ぶものハ一人もなし 多まじく流通の人有
とも其是ハ当場を離るゝにて居士の妙句長久発

来二人きて呼や此度よりまたをせぬやとて所かしく合
怖道の事まで非ぬ了形了次席遣取ゐる由しく
此度世間の評判を其角が耳に傳ふる昔ハ天下分
正花なりて有りて加へて正花をうらみなふ
在りまて我門建立の為に人々に紀えは角り狀
其角ハ俳諧にて紀故に身の上此をし何しを
志てまて却しハ上手也とて人々志てさ嫁りて思ふりん
人ハまよふてゐるふより芭蕉しに信心をわこまを追剝に
年々も此る理也度は其角も志てまちハ世間の

今まてあるさのひろそうりむ游を悔ひてたゆさハ
俳諧を辰めるへ其角が身上ハ喰ひうちまけ
加様にして人めろハむさおて奴哉をしく
名聞の為に俳諧をかさり今生ハ蕉門の俳諧を
それひ未来ハ撥舌の地獄に落らん事ハ
目るまち孫ハいよし正道の正風也静かに思案
この外は此道に拒否ハ天下蕉門に通ずの人ハ
惟然か其角か記の洒落をまて松々其角の性質の
殊勝をもるとかりて蕉門の姿情を何ちまてちろみ

是有る故に世ハ中々是は隠に戯しるハ俗人の誹謗
那り陽に世むるハ聖人の教誡之今なり一
流行けり蕉門の俳句を援拾く是非高論の行
句をも流出し此人折本ハ一事も秘ら家の用事
あるま事場も折紙の血判は誓詞香の罪源をおもむ
殊人能善の念佛ハ何事を流様の秘法と余り
始の逆縁とても誓起の罪ハ道理中流し九に
諷諫も挫とし夜の事也

一 名目傳に聲音走響音の事も
流是れ眼氏ハ

故翁在世の時に定るとハ起情の事之走とは拍子の
事之聲音ハ百句ら百句なり二句ノ三句ノ五句ならひを
以てハ附方の一名にかあらんと其時故翁師
雖然れ共ては此度大論に辯役を附てきはや
海ちを悔て中には能くも其場名目傳も其用の
附法として中には変して好き拾ひに居しるとへ
其場ハ連歌の式目を魂援とし專吟並傳を
流中ほとて覚るハ集え云るハ是那りの類ハ其場ら
名目を號ふるに知ふるに今ハ夜も桜の流るゝ来

を要となして
旧式を用ひける物数百條ありて古人ハ文字に
理屈を以てし今ハ言語の道理をさとしてあるを
貞享式の本懐とせり此度鶴坂集にかの花を
雑とせしハ其場景と成れはなましひに推
是らの旧式を備へし蕉門の新式は害をなせる
此度せむる事一の第一也それに其場の
　　然顔を續の趣向を措口はつとは前句に
不附當句の場なし其是らの無事と成度は

一
其場々又々の附方ハ情々々名目にあり此何成事をる
中にも俳諧ハ百句々百句ありて先づ姿有ハ後ハ
情ありて一句も姿情を離れてものなれ古風を
これく情を先にせずして附る故に俳諧の理屈を
以ハ今ハ姿故先にして俳諧の道理を以て十論ハ
姿情の論ありて其場をうしめ是こは連中ハ
情を先にする故に百句ハ百句なる理屈之七情ハ
理屈にて動くもの也是ハ理屈を人為の常情とせり
其是に其情を人にておし　ハハ火にて薪を其由也

よく蕉門の害なる事二也此度冨山連中ハ其情を
落入く性の拙さ志み多るよく其地ハ三四年の
病となりまさしく人ハ東国西国の人〃も其場ゟ
悔を請つきて永く蕉門の害をなせる我も〃
是を悔むのあまりやゝくい人と其場ニハ浮安情ハ
外のひかり有る海し辞す十論を以絶ゆる屋

一 我家の一大事ハ題句と句作との差別を志らく
目まゑんて其後を業とし屋く耳ニせて其情を
業まて居らし作を遊せ此四差別志らぬ時ハ人ノ事

俳諧を学ぶには唯し人ニ俳諧を教へらるゝ事と
其場ハ自己を忘れ須ら風雅の其場ハ上手嫌と無い
義去〃年石動あて毎句の是非あり家ニ其根
是に依て云語同じ是非ニ於ては其場と風雅
の甲乙ハ百と一のちのひとつあるも何と其場ハ
根から俳諧の名理を志ら須むへしハ俳諧ハ地
級者と（地ハ達者之とも中なとの事）聊り此故ニ其頃ハ加賀ニ北枝
有り尾張ニ露川ありと人の皆知る時ハ皆中作
其場も定まる故是非ある屋し今ハ天下の宗匠

と撥身律らり居士の号を称して文台の上座に
俳諧をなしき時に百韻ハ百色の変化ありといへとも
例に俳諧の一理を志らて縄ハ附合のさはりにのみ
に一巻の法式に及ぶく連中ハ其場を知識のこと
同かくまハ其場ハ一字の宿理をも傳へまて律なり
事を心ふなり外ハなし　今ハ十四五年も先
然るんハ其場ハ痩馬に荷なるこそありとや是んに
定る所見えて左ハなしむ宿意ハ其場に俳諧の地を
知るこそ一聞十知の上手とおもひ蕉門の徳まさ

ものに所撥は事加へましく蕉翁の冥慮にもおも
それ侍へよ其場に上をよく知りてかく的面にや
ものハ居老の外にハ其下に有る所し其場ハ武陽の
点者のとくにてるの為に俳諧をうりまて其名か
名のなり嘘をつき義ありきて今生ハ蕉門の害と
なり後生ハ四时台の　を得ん事しハ有りとてハ無益
の事なりては今なり所くりと　俳諧を捨てく
念佛斗に所撥はへりし若又俳諧を所愛なん
其事可成ハ東西へ此罪を觸るへし此ハん蕉門

の俳諧を蔑ろにしてむさむさく点者か一流をも
建立すとまれ

一 点者か心中ハ佛門の殊勝辨より故翁と肩を雙へ
俳諧の実体を法くり極なる式とせうを世とし
清さえんとハ此の外比轄の海徐也むりし西行
宗祇那と兼好と長明も又芭蕉翁も酒色乃
為にすを飲して風雅の房ふとハ殺諸へり此
故に文質もさのへり点者か末裔ハ荷立の禄つ
ふて傾城の身仕舞に郭屋の手鑑をもらし

靈の基所に掛盤の二お箸をたてし此連中の
志けに事を宗直ハあらて世為分明の俳諧の文飾ハ
我と我身を勤務へ点者ハ却て去るぬか自慢
のとし我もの那くハ陳の表世屋もしめて念佛
儀の出合志の新得し俳諧ハ点酒色の中より
得たひて尚我をたる時ハ其人をおもし我我
志るゝ時ハ点人を極致此二句ハ千誰も此旅人此人
肉を虚と実の徴にして外より風流の為之俳諧の
秘法ハ此事那利

一 半坊ハ専ら虚実を志して俳諧ハ実に居て虚に
遊ぶ事なりと翁先生ハ申されしといはゞ
其坊らの示ハ俗談平話之柄大名の虚実とは
大ナル成時ハ天地の未開を虚とし已開を実として無
小なる時ハ一念未生を已生とする是等ハ仏法の
沙汰なれハ儒仏ともいふべきもの　それよりハ
手みしかに半坊ハ夫婦共実に居て人が女房を
盗む時に我ハ虚に遊ぶとて人に振舞はりんが如き
ものハ犬猫の所行也実に虚実の前後を知りて

虚に居る時ハ女房の不信をとがむべからず又倫の
虚を知る故也人が女房を盗むまじきは世法に
実なる故に人ハ指さしてせらる也是ハ大
名の動と不動との沙汰なれハ童子ハ分らずして
てならば高の信偽とハ違ふ也
一 去る年三越の出会に金沢より小松へ書通し
俳諧の行ゑをいましめて惟然地の句二ツこの
ありある地の句一ツ手本にましかは
暁の夢に行灯は火をともし

嫁てふ子て而ん父殿の子て行ま

此句其坊評判ては此地て詠しき曲節ありてや
小国ハ不及中の尾張伊勢の山も見えさる自悟
て御中翁のこし

此に涼しく嫁てふ子て而し

其坊か涼子と屋きか涼子と此所謂の不の遠ひ
此句作かけ里ハ高雄其色の変之其坊ハ地と
其とての花判を見ての前句て節を附て案する
時ハ萎みなきをあすハ何やしゝく

いつ川きの萎み行竹の火を出と

太刀ぬきし殿の合扉のうけ

此花判みて見り詠へ趣向て地と節との花いつて
句作てハ曲とや事ハ何是と節とや事ハ不至てハ
此度三嶋の行先にて見て案三句を書候へ其坊か
手なきて立出はてし

一 人まち〳〵きていくん目れ玉

携間ハ辰の刻より暮る後ゝく

大地て割しゝ付く加てたち〳〵く

此三句ハ何れの所にても口すさみ筆にも人に知らせ
かゝる中にこそまことをもとめよとハいへの雅趣を旨とや此
七尾の何かる人のりくゆく

蛍かゝる闇の津く来れ下　米羽(?)

盗人の尺寸に垣根究見せく　蓮二

此二句をいはし老も自慢にて以てさき(?)
嘆きて人に語りきかせし此句ハ以て凝せしとおもむ

家ものに飽目ハ下結の杖つきく　蓮二

此句ハ盗人にハ天地におとりなきも思ひかへし

此趣ハ風雅の道之をも給ひ中に拷問ハ附合の
よしあしにハあらず俳諧識三の所とゝふ
前々も其を目の前に句人によりて居しくき
一説もいかゝハ楚こを宗匠の働とハ人ハ定かるく
虚実の段を知るべし

人よ来てれかい目の玉

拷問ハ桃子ねとめに何かむ貝

是ハ古戦の源七が廓の虚を責むる所なり
二重にに虚実の入用之

武ハ目の玉拷問も慮しかたき一趣あるハ二句ニ
似たるきこゆるを変して鎮西八郎の面かけ有
まり難き居し

人にきくまていかれ目出玉

拷問ハ居の刹より業る海く

弓箭の義理を文よこ海く

此附句ハ国の妻子も武勇に有て一趣の
連井も義理に感しく箭のいぬもきん絞安る
是を附合の様変とハ云なり此附方ハ二句を

なかみに一句に附しらふ哉ハ一句ニ二句附る法もあり
是を二句一家の級ともいふ由まハ俳諧の平生
是ハ三句めのたよひの大事之井波にく昨日の覚こ
論文互

先ぬく付し志たる　足縄

打絵子因果ふくめる断れ穴

火燵をのれて待ったる也

此三句の平生を見給へしるみのとき味わり早
不ハ新ら俳句に此人の生て事をいぬるを　俳諧

とハ中之文に三句めを二越にしたる為なり
例に我家の八躰をしるす
其人　其場　時分
時宜　天相　観相　面影
右我家の附方にして発句より挙句までも
一句に八句ツヽ附る法なり此を挨間の三句目
ならハ人ハ升越に仕り時分ハ当句にあり時宜ハ其
座其時にしたがふ色天相ハ又躰の附なり段
出せり

其場
挨間ハ辰の刻より暮る迄く
思ひかへしの松に凌霄
思ひ反しハ熟向も凌霄ハ句作なり
餘情ハ夕日の余照をみるべし

時節
挨間ハ辰の刻より暮る迄く
風吹く蝶の禮きてかと
冷秋ハ熟向なり禮と蝶の声の賦此句作之
餘情ハ殺罸の声を聞べし

天相
挨間ハ辰の刻より暮る迄く

一村雲にゆきちらし消く

村雲ハ趣向之電ハ句作なり
余情ハ天魔の変相とこゝろ屋

飲相

拷問ハ辰の刻より暮る海く

師走を余所に下りし凡絵

師走ハ趣向也凡絵ハ句作なり
余情ハ市中の隠宅とこゝろ屋し

面影

拷問ハ辰の刻より暮る海く

硯に紙の重石吹ちり

是玄軍書の仮になく為明の法句をかふ式外
草紙抱へてあまと儒書仏経の仮もおかし

さ外に空撓とて附方あり秘家の秘法なり
かの法孫の人にハ伝へても外人ハ三ヒの於にかけてやく
前句の案し働き情を附て月を出さ契し
拷問の所をかれハ此間にて文第をもち歩
さ書て其人にみちふらとせ尚み〔の〕窮策なり
[illegible]とく利きも[illegible]めの文にや

空撓　拷問ハ辰の刻より暮る海く

むまてちぬ文ハ神もとがめじ
是等の師傳なく作工夫ある處し是を秘法と
いふ事ハ笑ふ端をたしめ故この連中迄も京江戸
の俳諧師と常に此見撓の附方なく二句ハ推量
ホして居理をもて是以テ秘法と居東風刃
韵字の秘傳あるも此数也これらに顔向して
今作者列も人の情の前後もなき居き之若 又
貴坊が如きちみの句を堪能りと思ふ居
久まと天地に記みて付てと作へる苦痛の情を

一
先其前して加へちみのなめる後也蕉門の害と
此先ありとや死生随類各得解となんと思ふ
秘に蕉門の附合も朽ちてあらは從句とも、
貴坊が耳に此情が先附りと吹エ治りん許六
俳諧の一生前句へ附ゆるも我あるの滑稽
此様は早竟ハ虚実の段とあるを
貴坊が自讃の句にハくび切ルの腹切ルの山伏の石子
浮めあつらへ出て此むくと面白り変　の上刃
辰をまくとやりまる數ハ江戸は不角流　どく

学ふ人も此へゝ例に俳諧の談笑にはあらす志を深くしく
其場に平生をかへりみん後へ上品の一座乃
寄合にも居る時ハ器物に足をつゝ箸をとる
手も盃を持事も況や今指の口合なとゝ風情ハ
きへくふ拍子の生質にて談笑を家とせし
俳諧の風流にもかのゆふふる他事一とれちん
此自然に論を工夫あるへし

一 頃日其遊ら自讃の句とて三越の行先に写
てあり

白滝のこほれて落る数千丈
文寸のむさに世界一呑
夷筆に御筆を腹せしる許
此三句を蕉門の大害と心得しゝ故に蕉門
拂間のことき八世にらうけとりきて此事力
に例の海きまものゝして謂る情の内のひに蕉
門の害ゆり志へく其場ら指病の情附之志外
夕顔のゆるのことき八下手とみて論粧けりと
此三句にハ人のおまる句意ハ是又三越に此

邪正を分くるなれハ白紙に方寸が胸ハ是を
情として理屈とハいふ方寸の猶と夷等をハ前句の
謂とハ前句に呑し分りともいふ俳諧の大事ハ
意の死活なり其坊ハ前句を耳にとめて其の
情強葉なる所に前れ云語におもく添あり
大形くおもしろからぬ所をハ目をとめてきく人なれ
後るこれ其坊ハ大海の布子の裡口ハおもて縫ひて置く
面に眉尻を縮てかしこげに口ハ分くけなる一座
合点の出たけなのらんとく

　　方寸の胸より世界一呑
　　　捻しても花崗ひに懲(こり)ぬなり

俳諧を以て自己を恥る人なき眼の師ハ一座の人を
見て一生の俳諧のよし（あし）を知る也其坊も
田竜を出入見そこなひて三越の行先まで清
後座ハ其坊が恥を娘等いかくなるほどや物ふり
其坊ハ井波にて田龍に荘子よみきかせ分りて
此中のとし　口〻にいひて虚齋の二字も
何の音にて此漢語は此者又万端となん（しかし）は

囲庵ハ行先よく其坊へ古今傳授中させけれはよし
とあるが猶学ふにしたかひて三鉞の行先ハ皆治まりては
发をまて務へ其坊々白滝の三句ハ俳諧ニハ何くも
あまた詩歌の心を以て哀とん一二句ハ何の心をし
何れん三句目ハ其事ハ俳諧の平生ニ席すに宗匠
の働とハ何れ三句ともにありしと前句 也
廣大に氣をとりまる續ん俳諧とハ玄地なし
越して蕉門の十哲ハ松風去来ハ実情をあらはし
酒堂ハ俗語を用ひ許六ハ二なしをとれり

越人ハ形をりを滑く故雜も此丸中の働にては
及ばて作者とき人を宗匠にまた八百韻ハ百句
なるハ面々の一折かく又句を述へきてハ皆ゆかし
其場ハ其円を一色もよく其事よく書作者まて
の地に達者なりとハいへしに今ハ其の地まて
行きて上手の曲節を作学ひゆへハかの邯鄲に
歩を学で邯鄲の今ハ歩行に草履をききて
御をまへ作風の俳諧とハ正しくへ久しく
心を静めて流なりたなさへ席りゆへ蕉門 也

古老も皆〻失果て明後年遠忌也・にゐと
蕉坊ハ其時の助力ニハ隠して蕉門の害と激ニ
事ハ翁老ゟ存をも深く家にへり非もて原業
なすの事一也
一 蕉坊ハ十八の切字を用ひて切字の原理を傳授
其後折々の名目傳ニ幸濤の松も久々深知
飜も何とて推量の事を天下ニ書傳へ数万人ニ
伝人をおこし此世蕉坊ゟ科ハ何方へ隠しけりけりん
傳して時為の三段切の書き切字ハ一句も原理ニ

ふ叶且又手爾波をも能存ぬきや手爾ハ作妖ニ
似ぬる者ハ荷号ゟ橋もの文言を見殺しひとくル。
私ゟ者と出合候も久ル我をたる我とハ手ニなら段望く
大変文定の阿之浮我とも事ハ動ゟ我海る我乃
難之こまりあて折なをも恥候へ請ず
蕉坊ゟ奥書ニ如哲戒之旨と隠り戒とハ
の事為るニや之字以川きの肥言我難や
さ存と文言の自己をかへり之段何とくく大切の
名目傳為るた連中の学者ニ深見守ふ成候我

扨さハ此度不動尊にく和漢文操を見んてもらひ
難義なる事ハ無してもらひやれ実は増ハ東西共
国曲のも也しくの文章を書ちらし一章
もしく読く難き形く天下の笑草と成りし
是庭の賦のときき三字ほど事をも人ハ実
如きもちて我ハ怪しくもおかしき事ハ此の形る
天魔の入りかりけるや先年尺八の絡のことは如何なるか
も実なき思ひ出来増か学文も分上ハ
一千體詩をおし入るる曉の愚老なりさる人ぞ

さりとてハ自己を飲相志る人詩文不動の對面に
稲荷の発句切字の事を此人は何とせうを知りぬ
との申遣ハ定る連声の事にて背るしくゑ
なりたる連声の五音の相通に此人ハサシスセソの隣
ほど舌音之イキシチハ韻様に通せん

天長し地ハ門松此稲荷山

此切字ハ国君の為にハ長緩しかりとてハ天長
地久の中を切と中る理なれども増ハ現在の
この切字なるを形りひく切る字の名理をさる

ねこハ世事なり是非くじを少も申ましく
地体中而申く人の切に申事にハ申まじく不達
申お偽ても假文芭蕉なりしハ門松の稲荷抔と
形さ生ハて似合補事まてに候ハ
一 芭蕉ハ門人好ニて出来しみし折ふ紙に血判申せ
天下ニ何千人と云申自慢弟子むれハとし
且老ハ芭蕉より諸国を廻くまじく雲給ふ外に
門人ハむしとりもなし是故ハ天下に俳人ハ芭蕉翁の
徳をしたふ友なきハ風を望ハ去べし故ハ翁に門

人ありて芭蕉か俳諧の下手抔譏受ハあらましく候
自慢話あり又発句の樹歴もなき事なりハ
口でまかりの門人ハ多るハ俳諧無用ニて候得ハ俳諧ニ
おめおめ執く事を絶申候へハ門人好もやむものの
みてハ此口状ハ諸国中国北国へも申さハ関東国
北国斗ニて門人も居り候て申ハ惟西申まし
く候得ハ
一 右之條之故翁の牌前ニて　誦再三志て
申さハ芭蕉之四十年の旧交を捨て此状を

今生の名誉と存候者一事もなく探り入候
當場此上にも蕉門流に心入有之ハ於我等者
傳を諸國々に弘め(?)今世の俳諧にハ似也
湧り為るよしを諸人に申承候へ共是は廣額屠兒
之変へ〃りとも尚又辞譲申て候へハ愚老が敬翁もり
傳授仕候宗匠の入用ハ之れ(?)く申お傳て申候
當場ら執着の前非を改心(?)く候て蕉翁の本旨に
法式を相改め候へ志の有りはむかしの蕉門にハ
為ちは達(?)ゟりて人も識に辞譲りて申候今世の

罪も忽ちにあらためらく當場が執着の念佛も
あらためにハ致(?)申ましく候
但又今迄の悪き述もの申て前非をかくして合点
合点致し候ハ蕉門の邪正を糺申候合点に
候様に(?)
但又蕉門に敵して當場が一流を為(?)つる合点
あらハ當場が俳諧と芭蕉流の俳諧とハ天地の
違ひ申候當所に傳授なりあらへハ(?)芭蕉
事を申中達ゟ御座候其時ハ一言半句も當場が

俳諧ニ異論申居候は
しかし左様ハともかくも流派違ひ候は実ニ
押かくし前非をかくし候とても此方より
如此之誹諧へ申聞候へハ誹諧ゆかしく邪正ハ評判
仕るへくしゆりとてハ其心を引加へ
尾城ニ蕉門の一躰を成シ候へ共坊とても其老
四五年とても　或ハ色の俳諧ハ老後故
多のしく申事ハ十論の身一の修行
一人と旧友をうしひ候半事ハ老後の助け

きとも此中居候とても己此事世ニ而多候
侮り候ハとちらへも御思案可被下候　伊勢
まて貴報待入候以多羅

外のとし

八月十二日　蓮二

露川貴坊へ

此かきハ官醫山本宗洪翁壮年の比得写
せしものとて三戸ぬしおくられしをみるに
兎園ハ彼翁の號なれハ五絶堂の白兎園
宗瑞翁弟子あらしとかや也先剣術醫證を
院治卜の父なりさいを聞得しも天明之年
乃支の比出あらんと嘉かをさうひとく
とうおもれさらてうし　おしろくに十年
来一夏乃をし　若きとえのよのつえぬ
まそける　文政五年壬午六月十九日　馬琴

延享二乙丑年四月中旬写之

兎園